

専門用語研究

Journal of the Japan Terminology Association

No.16 1998-08

【学術用語集 計測工学編】の改訂と増補	山崎 弘郎	1
【学術用語集 図書館情報学編】改訂の経緯	上田 修一	7
【学術用語集 言語学編】紹介	宮島 達夫	13
文法用語と語学教育（フランス語を中心に）	青木 三郎	15
中国全国自然科学名詞審査決定委員会の紹介	李 青 行武かおり	18
国内刊行用語辞典リスト（1998前半）		20
「専門用語研究」投稿規定		25
編集後記		26

専門用語研究会
Japan Terminology Association

『学術用語集 計測工学編』の改訂と増補

Revision and Enlargement of Japanese Scientific Terms on Instrument Technology

山崎 弘郎* YAMASAKI Hiro

抄録：『学術用語集計測工学編』増訂版が1997年に刊行された。1973年出版の旧版が総計2439語であるのに対し、新しい用語が6632語追加され、総計で8768語となり、四半世紀にわたる計測工学の進歩発展が反映された。計測工学は横断形技術のため他の理工学と共通用語が多いが、他分野で固有の用語や訳語が定められていて、しばしば標準化の段階で問題が顕在化する。原案作成に従事した委員全員がPCを使用した作業の電子化により能率を大幅に向上させた。ローマ字表記に関する標準式の提案などについても報告する。さらに、用語集の期待される将来像として、データ電子化の成果を活用した1枚ですべての分野を収容できるCD-ROMをあげている。

キーワード：計測，専門用語，学術用語，横断形工学，ローマ字表記，編集作業の電子化，用語データベース

Abstracts : Revision process of Scientific Terms on Instrument Technology is described. Total number of included terms is increased to 8768 from 2439 of old edition due to rapid progress and enlargement of the technology.

Lateral structure of instrument technology shares numerous common terms with related fields.

Different translations for a common foreign term which are assigned in different proper fields, often conflicts in instrument technology.

Editing process is fully computerized and drafting period can be cut to three years.

A future image of the book on scientific terms on CD-ROM can include specific terms in all sciences and technologies.

Keywords : Measuring, Instrumentation, Instrument technology, Scientific terms, Lateral structure of engineering, Romanization of Japanese terms, Computerization of editing and drafting, Database of scientific terms

1. まえがき

文部省学術用語集「計測工学編」の改訂版が1997年7月に刊行された。これは1973年に出版された旧版を四半世紀後に改訂増補したものである。今回の改訂では、旧版用語が総計2,439語であるのに対し、「不確かさ、センサ、マイクロコンピュータ、環境基準、GPS、リモートセンシング、渦流量計」など、新しい用語ではあるが、この世界では日常的になっている用語が6,632語追加された。総計で8,768語となり、ほぼ四半世紀にわたる計測工学の進歩発展が反映された。

私は原案作成のための調査研究から刊行までの

過程で、まとめ役として問題解決に従事した。その経過を記述し、その過程で感じたことや今後の課題について私見を述べる。

2. 計測工学用語の特徴

計測工学は人の知の対象を量的に把握する目的で情報を獲得し、それを記述活用する技術を体系化した学問である。情報を獲得し、量の体系と結び付けて記述する横断型の技術の中核とするから理工学工学の基盤を形成する。したがって、計測工学に関する学術用語は他の学術分野と共通部分が多い。とくに、自動制御工学、情報処理工学、電気電子工学、機械工学などとは共通の用語が多く、また、物理学、化学などの理学、医学、心理学などとの関係も深い。

*横河総合研究所 Yokogawa Research Institute
Corporation 代表取締役会長(東京大学 名誉教授)

コンピュータをはじめとする情報関連技術の変化や進歩の影響を受け、計測技術の高度化多様化などが急激に進んでいる。次々と誕生する新しい概念を表現する適切な用語が選定されないと、異なる分野でそれぞれ固有の用語が作られたり、外国語がそのまま使われる。そのため、つねに標準化の求心力がないと混乱を招きやすい。

3. 改訂の経過

文部省は、昭和32年(1957年)に計測自動制御学会の前身である日本計測学会を代表学会として、計測工学の学術用語制定の事業を発足させた。その成果として、文部省『学術用語集 計測工学用語編』が昭和48年(1973年)に計測自動制御学会から出版された。それが今回改訂増補の対象となった旧版である。旧版で用語制定に従事されたのは、学術審議会計測工学用語専門委員会(主査磯部孝東大名誉教授、前主査山内二郎東大名誉教授)であった。その後15年以上経過し、計測工学の進歩発展を取り込んだ改訂増補が必要になった。また、計測と関連する分野の発展も、そこで誕生した新しい概念を表現する用語の標準化を要請していた。

平成元年(1989年)に、文部省より計測自動制御学会が委嘱を受けて計測工学の学術用語の見直しと改訂原案の作成を開始した。すなわち、平成元年科学研究費補助金総合研究(A)「計測工学用語標準化の調査研究」により同学会の中に計測工学用語標準化調査研究委員会が組織された。旧版作成の委員会幹事を務められた森村正直氏と飯塚幸三氏が調査研究委員会に参加され、私がまとめ役を務めることになった。同委員会委員名を表1に示す。

この委員会は、計測工学全分野にわたり学術用語の適否を検討した。その結果、旧版用語の中で適切と考えられる用語を残し、学問や技術の進歩により新たに追加すべき用語を選択した結果を平成3年3月に中間報告書にまとめた。その約100部を印刷、配布して関連専門家の意見を求め、それらを集約して平成4年3月に3年間の調査研究結果をまとめた成果報告書を提出した。さらに同委員会は前記報告書にもとづき、平成5年4月に計測工学用語選定原案を完成提出した。同原案に

表1 計測自動制御学会「計測工学用語標準化の調査研究」委員会

委員名簿(委員の所属は原案作成時(1990年))

委員長	山崎 弘郎	東京大学工学部
幹事	森村 正直	光計測技術開発(株)
幹事	栗田 良春	計量研究所
幹事	作間 英一	計量研究所
幹事	北森 俊行	東京大学工学部
委員	赤塚 孝雄	山形大学工学部
"	飯塚 幸三	(株)クボタ
"	五十嵐 伊勢美	(株)豊田中央研究所
"	井深 丹	横河電機(株)
"	大園 成	東京大学工学部
"	川瀬 晃	セイコー電子工業(株)
"	小林 彬	東京工業大学工学部
"	小宮 勤一	九州工業大学工学部
"	高木 相	東北大学工学部
"	谷江 和雄	機械技術研究所
"	富増 多喜夫	(株)自由電子レーザ研究所
"	根本 俊雄	明治大学理工学部
"	藤村 貞夫	東京大学工学部
"	松田 浄史	機械技術研究所

従い、第13期学術審議会学術用語分科会運営委員会に計測に関連する学会代表などを加えて計測工学用語専門委員会が設置された。委員名を表2に示す。

同専門委員会は選定原案の補正、関連分野の用語との横断的な調整などの作業を行い、審査案を運営委員会に提出した。

平成6年(1994年)1月、審査案は学術審議会学術用語分科会計測工学用語専門委員会および分科会にて審議され、さらに平成6年1月に運営委員会にて一部修正にて承認された。さらに、平成6年(1994年)2月、学術審議会総会にて承認され、新しい用語集の発行が決定された。そして、最初に述べたように平成9年(1997年)にコロナ社から発行された。

今回の改訂では、新しい用語が6,632語追加されたが、旧版用語のうち416語が見直しの結果廃止され、約100語が修正された。

表2 文部省 第13期 学術審議会

学術用語分科会 計測工学用語専門委員会
委員名簿

主査(委員)	市川 惇信	国立環境研究所
専門委員	青戸 邦夫	元文部省学術調査官
"	大園 成夫	東京大学 工学部
"	菅野 允	玉川大学 工学部
"	北森 俊行	東京大学 工学部
"	久保田正明	工業技術院 物質工学工業技術研究所
"	作間 英一	工業技術院計量研究所
"	辻 茂	高度職業能力開発促進 センター
"	正田 英介	東京大学 工学部
"	森村 正直	(株)テラテック
"	山崎 弘郎	横河電機(株)

この結果、総計で約3.5倍の語数に増加し、ほぼ四半世紀にわたる進歩発展が反映された。

4. 新しい学術用語集作成の方針と作業経過

4.1 計測工学用語の体系化、概念の整理、分類コード付加

計測工学の進歩と関連領域の拡大、新しい境界領域の出現などが顕著で、特に生体関係、環境計測への拡張やコンピュータの進歩による信号処理の高度化、知能化、自動化の進展がめざましい。したがって、用語の体系化、概念の整理など、用語の原点にたちかえり検討した。その結果、表3に示す様に分野の分類コードを数字で指定し、各用語にそれが主として使用される分野のコード数字を付記することとした。

4.2 標準化のための用語選択基準の検討

学術用語は学術的な概念を適切に表現し、正しく伝達するものでなければならないから、専門分野や学問領域を超えた共通性や普遍性が必要である。用語選択の基準については審査基準¹⁾があり、概念を記述する適切な用語を唯一に定めることにより、複数の用語の流布を避け、混乱を防ぐこと

表3 「計測工学の分野分類とコード」

- (01) 計測一般・共通
- (02) 計測理論・品質管理
- (03) センサ・センシング
- (04) 計算機・信号情報処理
- (05) システム・制御
- (06) 工業計測
- (07) 幾何計測
- (08) 力学計測
- (09) 体積・流量計測
- (10) 温度計測
- (11) 電気・電子計測
- (12) 音響
- (13) 光学・分光
- (14) 物理計測
- (15) 化学計測
- (16) 放射線計測
- (17) ロボット
- (18) 宇宙・航空・測地
- (19) 医用・生体・感覚
- (20) 環境

を目的として次のような基準を定めた。

- (1) 学術上の議論で現在実際に使われている用語のみを選択する。ただし、現在多用されない用語であっても、計測用語として歴史的に保存すべき用語、過去に重要な役割を果たした用語は保存する。
- (2) 概念の階層構造に留意して上位の用語から選択する。
- (3) 計測工学と他分野の境界にある用語も採録する。
- (4) 他分野の用語はその分野の学術用語集の用語を尊重する。
- (5) 外来語(カタカナ用語)を避けない。
- (6) 略号はなるべく避ける。
- (7) 名詞形を優先し、修飾語や修飾された用語は原則として除外する。
- (8) 単位名についてはS Iを尊重する。

4.3 旧用語の検討と用語の新規登録

学術用語集「計測工学編」旧版に採録されてい

る用語(2,439語)を18の分野に分類し、各分野についてそれぞれ複数の専門担当委員による分科会により検討して案を作成し、調査研究委員会で逐語審議を実施した。その結果、416語が廃止された。

表3に示す20分野について次の参考文献などから用語を収録し、採否、修正などの審議を実施した。

登録候補用語を収録した文献は次の通り。

- (1) 関連分野の学術用語集
- (2) JIS-Z8103(計測用語)などの国内規格
- (3) ISO,SI,VIMなどの海外規格
- (4) 関連分野の用語辞典など
- (5) IMEKO(国際計測連合)の技術委員会で作成した計測専門用語集

当初の案では総数11,000語であったが、分野の重複を除き、さらに審議の結果6,632語が新規登録された。

4.4 新規採用あるいは廃止された用語

(1) 新たに採用された用語例

新たに開発された素子、手法、システム、新たに定着した外国語など：

不確かさ、センサ、マイクロコンピュータ、フェイルセーフ、環境基準、地球温暖化、地球規模測位システム(GPS)、リモートセンシング、ファイバ・ジャイロ、渦流量計など。

(2) 廃止された用語例

使われない不適当な訳語、使われなくなった手法や機器、学術研究の成果発表に使われない非SI単位名など：

安定さ、正確率、手さぐり法、データ整理、図式解析、ブッシュル「体積の単位」、ポイント「体積の単位」、鏡伸び計、光電池高温計など。

4.5 コンピュータと電子媒体の使用

調査研究活動および原案作成、検討の各作業段階において、委員が所持するパーソナルコンピュータを使用して作業を電子化した。

現行用語および新規に収集した候補用語を包含するデータベースを作成し、フロッピーディスクを媒体に使用して各委員が情報を共有した。編集

処理、委員相互間の情報交換などを媒体とデータベースとを活用して実行した。

これにより作業の密度と効率とを大幅に高めることができ、用語数の大幅拡大にもかかわらず3年間で原案をまとめることができた。

その後、諸般の事情により、出版までにさらに3年が経過した。旧版が出版までに16年を要したのに比較すれば、3分の1近くに短縮されているが、後半の過程をさらに短縮するのが今後の課題であろう。

5. 原案作成上の問題点と補足意見

5.1 他学術分野との整合

原案が作成された段階で、関連学会の代表者を含む学術審議会学術用語分科会計測工学用語専門委員会において、関連分野の間の整合性を中心に原案が検討された。

計測工学の様に横断形で、多くの関連分野を持つ工学においては、複数関連学術分野と共通用語が多い。しかし、その共通用語や対応外国語が学術分野により固有用語として規定されているが、分野間で相互に異なる場合がある。これは学術用語の矛盾なのであるが、矛盾が計測工学の内部で顕在化する。たとえば、超伝導(物理学)と超電導(電気工学)の様な場合である。この例のように計測との関連が間接的である用語では、4.2(4)の基準に従い、関連分野との整合性を重視すると、計測の分野では、一つの用語を定めることができなかった。

また、外国語をカナ表記をしたものでは、白色雑音のようなホワイトノイズに比較すると、広く使われてはいない訳語を関連分野との整合性を重視して採用せざるを得なかった。一方で、ピンクノイズが採用されているのであるから、計測工学の分野の中では整合性が悪いことになる。

計測工学の中核となる用語では、計測分野で多用される用語を採用したことは当然である。

今後も計測用語にとって他分野との整合性は重要ではあるが、本来、学術用語の改訂には変化する言葉を新しく取り入れる目的があるので、整合性にとらわれすぎると本来の改訂の目的にそぐわない恐れがある。この問題は計測工学のように横

断型の学問においては特に重要である。

5.2 「計測」の対応英語

用語の中核である「計測」に適切な対応英語がなくて苦労した。旧版ではinstrumentationが使われていた。英国では今でも計測にほぼ対応しているが、米国では計測とは異なる計装の意味で使われている。「計装」は計測のために計測器やセンサなどを設置することであり、装備や装置を意味する用語である。

その結果、measuringが、最も適切とは思われないが、次善の用語として選択された。

なお、measurementは「測定」に対応し、測定は計測より狭く、下位の概念であると考えている。

5.3 ローマ字表記についての検討と意見

学術用語集は、用語とその読みがローマ字で示され、さらに対応英語が記載される。配列順により和英の部と英和の部とに2分されている。

ローマ字表記の目的は外国人に用語の「読み」を仮名に代って示すためであろう。

そのローマ字表記は、昭和49年1月文部省学術局情報図書館課の指示により、内閣告示第1号(昭和29年12月9日)「ローマ字のつづり方」の第1表による訓令式が標準と定められている。しかし、原案を作成した計測工学用語標準化調査研究委員会は、下記の(1)および(2)に示した理由により、標準式(修正ヘボン式)を採用するのが使用者にとって便利で、合理的であると結論し、訓令式でなく、標準式の使用を提案した。次の例で、いずれが読みやすいか差は明らかであろう。²⁾

標準式 : gakuju tsu yōgoshū

訓令式 : gakuzyutu yōgosityū

標準式を提案する理由

(1) 用語集を用いる外国人(今後、この用語集を用いる外国人留学生や研修生が増加するであろう)にとって、この読みの欄は非常に重要である。そのために実際の発音に近い綴りとすべきであり、この点から、標準式を採用すべきと考える。ちなみに駅名や道路標識の表示はすべて標準式である。また、日本人のパスポート申請におけるローマ字

表記はヘボン式によることが要求されている。いずれも外国人にとって、どちらが読みやすいかの判断によるものであろう。

(2) この用語集を用いる日本人が、標準式、すなわち、修正ヘボン式になじんでいること。ちなみに、国立国会図書館発行の「日本科学技術関係逐次刊行物総覧」(1988)、JICST資料所蔵目録(1986)は両方ともに、標準式を用いている。そして、調べたかぎりでは、類書で訓令式に準拠したものは見当たらない。和-英語辞典で訓令式に準拠したものはない。

ヘボン式の採用については戦後の占領軍の影響であるとか、英米語の発音に近いだけで、他の外国語の発音とは異なるとの反論がある。しかし、本用語集は、対応外国語に英語を選んだのであるから、英語を使う立場を優先するのが合理的である。

1989年にISO3602 Documentation Romanization of Japanese (Kana script) が、原案では標準式であったのが訓令式に変更されて、国際標準となったとのことである。³⁾ この種の標準についてのISOの基本的な考えは、その国の意見に従うとのことである。私には変更や制定のいきさつはわからないが、この結果については納得できない。

われわれの提案は現行法令の変更を要するとの理由で、今回は残念ながら採用されなかった。

近い将来用語集がどのような人達によって、どのように使われるべきかを検討したとき、今回のわれわれの提案が再検討されることを期待したい。

5.4 出版原稿の校正

大幅に増加した用語数を収容した用語集の出版原稿の校正は、予想より大きな作業負担となった。理由の一つは原案作成段階で、データベース作成のためのデータ入力を非専門家にも依頼したことである。また、ローマ字入力、日本人にとっても不慣れた訓令式のためか誤りが多かった。結局全体を少数の専門家が繰り返し校正を行うことになり、原案を作成した標準化研究委員会の幹事と委員長がそれにあたった。今後、作業の電子化は

ますます進むであろうが、用語集の表記もコンピュータを使用した作業に適したものにしないと、電子化により全体の効率をあげることにならない。

6. むすび

6.1 今後の課題と問題点

学術用語にかかわる仕事に私は不慣れであったため、一緒に仕事をした方々にご負担やご迷惑をかけた。それらの方々のご支援により、出版までこぎつけることができたことを感謝している。しかし、その過程にあって、素人として基本的な疑問を抱いた。それは用語集の目的と誰のためにとの基本的疑問である。

学術用語集は用語とその読みがローマ字で示され、さらに対応英語が記載される形式である。この形式は外国の先進科学技術を導入し、それに追いつくことを目的としていた時代には有効であった。外国で提案された概念の訳語を統一標準化する役割を果たしていた。対応英語は概念の短縮された説明をも兼ねていたのである。

これからは、わが国で誕生した新しい概念や技術を外国語でどのように表現するかを知らせることも重要な目的となる。さらに、外国からの留学生や研修生などの増加に見られる国際化では、概念や技術の定義や意味内容と発音とを教示する役割が期待されよう。

このような時代の趨勢を考慮すると、用語の標準化に加えて概念の伝達と普及とが重要になるから現在の形式では不十分である。簡単な辞典の役割が期待されるし、外国人にわかりやすいローマ字表記が必要である。

6.2 将来への期待—電子化用語集

問題点と課題とをあげたが、今回の成果をさらに発展することにより課題を解決できると思うので、将来への期待を込めて、電子化学術用語集についてふれたい。

計測工学用語に関しては、今回の改訂により用語のデータベースの基礎が完成しているのであるから、これに概念の階層構造を加えると、重要な用語について定義や意味を付加するなどで充実

を図ることができよう。また、ローマ字表記についても、ほとんどが機械的に変換できるから、電子化された媒体上にある学術用語集データは今後の大きな発展の基礎とすることができる。

さらに、冊子ではなく、CD-ROMによる出版を考慮すべきであろう。何よりもコンパクトであり、工学全部が1枚に収まるのではないだろうか。

今回の改訂以前に複数分野の学術用語集を集成したものが文部省学術情報センターによりCD-ROMで制作されたことがある。⁴⁾全工学を収容したCD-ROM用語集が実現すれば、前述の理工学分野による用語の相違などの矛盾が明確になるし、キーボード操作により、現在の訓令式の不便も標準式訓令式のいずれをも受け入れるPCのフロントエンドプロセッサにより解消されるであろう。

さらに改訂増補の作業も迅速化するため常にアップデートされた使いやすい用語集が期待できる。

謝辞

文部省、計測自動制御学会の関係者各位、特に苦勞とともにされた計測工学用語標準化調査研究委員会の森村正直、栗田良春、北森俊行、作間英一の各幹事、委員各位、学術用語分科会計測工学用語専門委員会の委員各位に厚く御礼を申し上げます。

さらに、原稿を丁寧に検討された文部省元学術調査官青戸邦夫氏と作業の電子化を推進された計測自動制御学会事務局並木正美氏のご尽力、出版を担当されたコロナ社の関係者に厚く感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 学術用語審査基準 学術審議会学術用語分科会 昭和44年9月決定、平成4年1月改正
- 2) 森村正直、科学技術研究の未来、pp184-186、丸善ブックス(1996)
- 3) 青戸邦夫、ローマ字による学術用語の書き表し方、専門用語研究 No14、pp 10-16(1997)
- 4) 青戸邦夫、戦後半世紀の学術用語標準化の歩み、学術月報 48-4 pp 408(1995)

『学術用語集 図書館情報学編』改訂の経緯

Compilation of Japanese scientific terms: Library and Information Science

上田 修一* UEDA Shuichi

抄録: 1958 (昭和33) 年に出版された『学術用語集 図書館学編』は、改訂され1997 (平成9) 年に『学術用語集 図書館情報学編』として刊行された。改訂にともなう作業を手順や方針を中心に述べた。さらに、旧版より用語数が減少した理由、学術用語集の特色などについて言及した。

キーワード: 学術用語集, 図書館情報学, 用語集

1. はじめに

『学術用語集 図書館情報学編』¹⁾ は、1997 (平成9) 年春に刊行された。これは、1958 (昭和33) 年に出版された『学術用語集 図書館学編』を40年ぶりに改訂したものである。改訂作業は1990 (平成2) 年に開始されたので、刊行までに7年以上を費やしている。しかし、1995 (平成7) 年までに原案がほぼ確定しているため、実質的な編集作業期間は約5年である。

この『学術用語集 図書館情報学編』の編集作業は、大枠においては他の学術用語集と相違はない。強いて、特色をあげるとするならば、「図書館学」から「図書館情報学」への分野名の変更、前版と比較した場合の収録語数の減少、そして、編集作業へのデータベースの導入などがある。また、収録用語には専門部門による分類を付すなどの工夫をした。さらに、この学術用語集の刊行後、日本図書館学会の手によって、収録用語に解説を与えた『図書館情報学用語辞典』が編集・刊行されている。

2. 編集の経緯

学術用語集はそれぞれの学会によって作成されるが、学会によって編集の仕方は様々である。今後の参考となる点もありうると考え、その経緯について、手順や採用した方針を中心として述べる

ことにする。

制定までの大まかな経緯を表1 (次ページ) に示した。

2.1 目的

1990 (平成2) 年度後半から文部省科学研究費総合研究 (A) 「図書館情報学用語標準化の調査研究」 (研究代表者 長澤雅男東大教授) を得て、準備作業を始めた。まずこの調査研究の目的を以下のように定めた。

文部省学術用語集「図書館学編」は昭和33年に刊行され、すでに30年余が経過している。この間に図書館学あるいは図書館情報学の研究の発展によって、旧「図書館学編」に収録されている用語の大多数を見直すとともに、新しく使われるようになった多数の語を収録することが必要となっている。本研究は「図書館学編」を全面的に改訂し、「図書館情報学編」を編纂することにより、図書館情報学および関連諸分野における研究者間の学術情報の伝達、学校教育における標準的な語彙の提供、および一般社会における情報伝達に役立てることを目的とする。

なお、作成される学術用語集の名称は、分野の発展を考慮して『図書館情報学編』とした。

2.2 組織

研究組織として、研究代表者、研究分担者 (25

*慶應義塾大学文学部

School of Library and Information Science, Keio University

表 1 刊行までの経緯

1947(昭和22)年 2月	学術研究会議の学術文献調査特別委員会に学術用語調査研究科会設置。人文科学関係では最初の領域として図書館学が取り上げられ、学術用語の制定作業に着手。
1958(昭和33)年 5月	『学術用語集図書館学編』刊行。
1990(平成2)年	文部省科学研究費総合研究(A)「図書館情報学用語標準化の調査研究」申請。平成2年度(1990年度)後半から平成4年度(1992年度)まで科学研究費の交付決定。研究調整グループによる計画書の作成作業、各種用語集から用語の収集・入力作業
1991(平成3)年 1月	全体会議により作業方針と作業計画を検討。
2月	全体会議により分科会を編成。
5月	用語リスト(14,052語)を配布。分科会による検討を開始。
1992(平成4)年 3月	分科会による検討がほぼ終了。
4月	候補用語(5,575語)リストを作成。
5月	調整委員会による調整作業を開始。 用語(2,541語)リスト作成および仮分類。
8月	全体会議により第二次検討の方針を決定。 分科会による第二次検討を開始。
11月	分科会代表と調整委員会との検討会開催。
1993(平成5)年 1月	調整委員会による外国語表記などの検討。
3月	科学研究費による研究成果報告書として『学術用語集図書館情報学編暫定版』作成・配布。
4月	日本図書館学会内に図書館情報学用語委員会を設置して、『学術用語用語集図書館情報学編暫定版』に基づいて、『学術用語集図書館情報学編』の原案作成を開始。
1994(平成6)年 7月	図書館情報学用語委員会が「図書館情報学用語選定原案」を作成。
12月	学術審議会学術用語分科会図書館情報学用語専門委員会(第1回)
1995(平成7)年 2月	学術審議会学術用語分科会図書館情報学用語専門委員会(第2回)
4月	学術審議会学術用語分科会図書館情報学用語専門委員会(第3回)において原案を審議し、図書館情報学の学術用語を改定するための審査案作成。
6月	学術審議会学術用語分科会運営委員会で審査案を審議の後、学術用語(図書館情報学)の改定案を了承。
1997(平成9)年 3月	『学術用語集 図書館情報学編』刊行。

名)と研究協力者(42名)からなる研究組織を設けた。研究代表者、研究分担者からなる全体会議を置き、作業方針や用語の選定・調整方針の最終的な決定機関とした。領域別の用語の選定作業は、研究分担者と研究協力者からなる分科会で行なった。分科会は、教育、公共図書館、大学図書館、学校図書館、専門図書館、資料選択、目録・分類Ⅰ(目録)、目録・分類Ⅱ(索引)、目録・分類Ⅲ(分類)、図書館資料、利用、情報管理Ⅰ、情報管理Ⅱ、書誌学Ⅰ(西洋)、書誌学Ⅱ(東洋)、書誌学Ⅲ(日本)から成っている。

さらに、用語の調整作業のために調整委員会

(16名)を設け、そのもとに、研究の進行管理などを行なう研究管理グループおよび用語の採録・調整、用語管理、リスト作成などを行なう研究調整グループを置いた。

研究の後半の調整段階においては、研究管理、研究調整の各グループのメンバーを含めた拡大調整委員会(13名)によって、用語の調整作業を行なった。また、各分科会と調整委員会でより詳しい検討を行なうために分科会と調整委員会の検討会を開催した。

全体の作業内容は以下の通りである。

① 作業計画の立案

- ② 用語選定方針の作成
- ③ 用語データベースと検討用リストの作成
- ④ 分科会による用語の選択
- ⑤ 調整委員会による調整作業
- ⑥ 分科会による再検討
- ⑦ 調整委員会による最終調整（外国語，ローマ字部分の検討）
- ⑧ 暫定版の作成

2.3 用語選定方針

最初に作業計画を立て、用語選定方針を作成した後、用語データベースと検討用リストの作成を進めた。

「図書館情報学用語選定方針」として、以下のような項目を定めた。

- (1) 「学術用語審査基準」に従う。
- (2) 「学術用語集の改訂・増補の方針」に従う。
- (3) 「学術用語集 図書館学編」収録用語は一語ずつ検討し、改訂、削除を決定する。
- (4) 隣接分野・関連分野に属する用語は、図書館情報学分野の文献で使用例のあるものを選定する。

参考：隣接分野の既存の学術用語集として「教育学編」，「社会学編」，「言語学編」などがある。

また、JIS用語規格として「情報処理用語」(X0001～X0021)がある。

- (5) 人名，地名，時代名，施設名，団体・機関名，商標登録されている商品名および法令などの固有名詞は選定しない。
- (6) 研究対象となる概念を中心とし、業務に用いる語は原則として選定しない。
- (7) 原則として全ての用語に対応する外国語（原則として英語）を示す。
- (8) 選定した用語に同義語，類語，反意語があれば必ず示す。
- (9) 複合語は、構成要素となる語を原則として3語以内にとどめる。
- (10) 複合語に「・」は一切用いない。
- (11) 選定した用語は、原則として名詞とし、助詞をともなう名詞句は避ける。

上記の(1)(2)は当然のことであるが、担当者に基準を周知するために敢えて加えたものである。

2.4 用語データベースの作成

準備作業として時間を要したのは、用語データベースと検討用リストの作成である。図書館情報学分野には、数多くの用語集があるので、旧版に加え、以下の図書館情報学関係用語集、辞書などから見出し語、英語、参照を入力し、データベース化した。

学術用語集・図書館学	3,692語
ALA図書館情報学用語辞典	4,067語
日本図書館協会用語集	2,354語
図書館用語辞典（角川書店）	2,002語
JISドキュメンテーション用語	381語
ユネスコ情報管理用語集	1,259語
図書館 情報学ハンドブック付録 （書誌学，コンピュータ，通信）	1,687語
書物語辞典	2,739語
日本目録規則1987年版用語解説	264語
英米目録規則第二版用語解説	209語
英米目録規則第二版和英対照	452語
JICSTシソーラス	377語
計	19,483語

2.5 分科会による検討

これら19,483語の中の重複を整理した結果、異なり語数は14,042語となった。これらを、全用語を掲げた「総合リスト」、部門別に用語を掲げた「部門別リスト」、全用語を外国語から探せるようにした索引である「外国語索引」の三種類のリストに編集し、分科会毎に評価を行った。評価の規準は、

- A:学術用語として問題なく採用する用語
- B:学術用語として採用してもよいが、Aよりも重要度の落ちる用語
- C:学術用語としないが、分科会内で支持のある用語
- D:学術用語としない用語
- X:判断を保留する用語
- R:他の分科会で検討したほうがよい用語

とし、さらに各分科会は、用語の追加提案を行った。

2.6 調整作業

この結果、AからCの判定を得た用語は4,506語、追加用語は1,069語、計5,575語となった。しかしながら、分科会によって判断に揺れがあり、調整委員会により一定の規準で検討し直す必要が生じた。全体として、用語を精選する方向で下記に該当する用語を除くことにして、一語づつ採否を判断した。

- ① 専門用語ではなく、一般語であるもの
- ② 他の分野の専門用語
- ③ 一般語の組合せで表現できる複合語
- ④ 図書館情報学分野の学術用語の組合せで表現できる複合語
- ⑤ 特定性が過剰である語
- ⑥ 事務作業用の用語
- ⑦ 現在、あるいは日本で使用されていない用語
- ⑧ 固有名の中で団体名等
- ⑨ 4語以上からなる複合語
- ⑩ 学術用語ではない表記である語

一方では、一定の用語数の確保に留意しつつ、固有名のうち分類法、件名標目表、標準番号等、図書の各部の名称、目録対象は採用するなどの方針を立てた。

2.7 暫定版の作成

この調整作業により、2,541語が採用され、これらのリストを作成し、各分科会に配布し再度、検討を求めた。その後、調整委員会と分科会との間で検討会を開催し、問題のある語を一語づつ検討する作業を行った。最終的には2,201語となり、これを収録した『学術用語集 図書館情報学編 暫定版』を科学研究費の報告書として作成し、関係者、機関に配布した。また、日本図書館学会の研究大会で発表²⁾するなどして、広く意見を求めた。

3. 日本図書館学会による検討

科学研究費による調査研究の後、1993(平成5)年4月に、日本図書館学会の中に図書館情報学用語委員会(委員長 岩猿敏生会長)を設け、『暫定版』に基づいて学術用語集原案作成の作業を始めた。『暫定版』に対して寄せられた意見をもとに全用語を見直し、同年10月に『改訂第一版』(2,105語)を作成した。さらに関連学会からの意見をもとに検討を重ね、1994(平成6)年7月に『図書館情報学用語選定原案』を作成した。

4. 学術審議会用語分科会による審議

1994(平成6)年12月から学術審議会学術用語分科会に設けられた図書館情報学用語専門委員会では3回にわたり、同『選定原案』の審議が行われた。広い立場からの意見が出され、十数語について変更、削除がなされた後「審査案」が作成され、これが1995(平成7)年6月に同分科会の運営委員会です承された。

その後、出版用のリストを付けるなどして、約1年半後の1997(平成9)年3月に『学術用語集 図書館情報学編』として刊行された。

5. 旧版からの用語数の減少と収録範囲

約40年前に刊行された旧版『学術用語集 図書館学編』は、約3,700語を収録していたが、改訂版の収録語数は2,103語と約2/3に減少している。これは、収録範囲と関わりがある。旧版は、書誌学、印刷、出版の用語が多く、全体の1/3を占め、さらに写真とマイクロフィルムの用語がかなり多かった。また、図書館の実務に関する用語も数多く収録されていた。米国図書館協会による用語辞典『ALA図書館情報学用語辞典』は約4,000語を収録しているが、やはり写真やマイクロフィルム用語がかなりの部分を占めている。コンピュータ用語も多い。改訂版では、書誌学、印刷、出版の用語は極力少なくし、また写真とマイクロフィルム用語もコンピュータ用語もほとんど収録していない。

書誌学や印刷、出版は基本的に図書館情報学とは別の分野であり、図書館情報学に深く関わる用語以外を網羅的に収録する必要はない。写真やマ

イクロ写真技術は、20世紀前半から米国を中心として図書館学およびその関連する領域で広く使われてきた技術であるが、現在では関わりのある技術の一つと位置づけられる。コンピュータ技術を含めてそれぞれの分野での用語の標準化が行われている現状を考え、写真、マイクロフィルム、コンピュータ用語は含めなかった。

図書館の実務で使われる語も収録対象からはずしたために、旧版から残っているのは860語であるにすぎない。今回の改訂作業は旧版に基いてはいるものの、収録範囲などの枠組みを一新し、30年以上の空白を一挙に埋めるものとなっている。今後の改訂版では、収録語数が増加していくことは確実である。

6. データベースによる用語の管理

今回の改訂作業では、パーソナルコンピュータのデータベースソフトウェアを用いて、最初から全用語を入力していった。これにより、用語の管理が容易になり、用語集に必須であるリスト化作業が軽減化された。また、データの持ち運びも極めてやすくなった。

こうした利点があるのは確かであるが、学術用語集特有の問題もある。用語集の編集の過程では、用語の削除や追加の他に用語の表記が変更されることが多い。そのために、データベース上の個々の用語レコードの同一性をどのように保持するかという問題が生じる。簡単に言えば、日本語の表記形が少しでも変われば別レコードとするのか、それとも概念を表わすとされる外国語表記が同一であれば、そのままとするかといったことである。では外国語表記を変えた時には新しい用語レコードを作るべきだろうか。

今回は、レコードの識別番号で概念の同一性の保持を行ったが、恣意的な判断が入り混じることになる。

実はこの問題は、学術用語集の特質を表わしている。学術用語はその概念(意味)に基づき用語の表記を決めることになっている。しかし、実際には、用語の表記は概念によって決まる一方、表記によって概念も決まるというように、表記と概念は相互の関係の上で成り立っていると考えられる。

7. 学術用語集の

編集作業を通じて、改めて考えざるを得なかったのは『学術用語集』編纂が国の行う事業となっており、その影響を強く受けるという点である。科学研究費によって準備作業がなされ、学術審議会学術用語分科会による審議を経て刊行される。著作権は文部省と担当学会が持っている。学術用語集は単に研究において用いられるだけではなく、教科書等に用いられる用語の統一の役割を果たすなど教育との関わりも強い。また、常用漢字表や仮名遣いをはじめとする国語に関する各種の基準の枠内に置かれている。

戦後、この学術用語集編纂事業が始まって以来、1960(昭和35)年に作られた「学術用語審査基準」を継承した現「学術用語審査基準」(1968(昭和44)年決定、1992(平成4)年最終改正)とそこで引用されている表記に関する諸基準や方針に従って学術用語集は作成されてきている。編集担当者は、これら個々の基準とその背後の考え方を理解することが求められる。しかし、これらは集めてみればかなりの量となり、全てに精通するのは容易なことではない。国の事業であるために、整合性、さらには無矛盾性が求められるが、それを貫徹するにはかなりの困難が伴う。

学術用語集は、日本語の表記とその読み方を示すローマ字、それに対応外国語からなっている。担当の委員の間には「用語の定義を記さなければ無意味である」、「ローマ字をヘボン式にできないか」といった意見があったが、それは、この学術用語集の体系の中ではできないことである。学術用語集は、「学術上の概念を適正に表す」語を定めるのであって、その定義を記述するには用語辞典を編纂するなど別の手段をとらなければならない。「一般に定義が既知であると考えられる外国語又は学術団体などで定義付けされた外国語を、便宜上用語に対応させて定義に代える」とされているので、対応外国語が暗黙の定義ということになる。また、「ローマ字による学術用語の書き表し方」(1974(昭和49)年)によれば、ローマ字の表記は1954(昭和29)年の内閣告示「ローマ字のつづり方」の第1表、すなわち一般に言われている訓令式に従うとされており、ヘボン式にした

いのであれば、内閣告示の改正を求めるしかないのである。

学術用語の選定は、個々の分野の専門家に委ねられているが、審査案の作成から出版物となるまでの過程では、諸基準および前例という膨大な蓄積に基づく判断が求められる。複雑化したこうした処理をいつまで継続できるかが問題である。一方では、学術用語集を実際に編集した経験がなければ、過去の蓄積の継承は難しいと考えられる。

学術用語集は該当の学会が中心となって編集するが、短期間で改訂されることは少ないので、担当委員は変わり、そのために経験を積み重ねるのも同様に困難である。

『学術用語集 図書館情報学編』に関しては、実際の作業に若手の研究者を動員することにより、経験を蓄積することができたと考えられる。これにより、今後は、短い周期での改訂作業が可能に

なるであろう。

本稿は、科学研究費による調査研究の報告書³⁾に基づいて記述した、ただし、5から7は筆者個人の見解である。

- 1) 文部省, 日本図書館学会編. 学術用語集 図書館情報学編. 東京, 丸善, 1997, 165p
- 2) 長澤雅男, 岩猿敏生, 三浦逸雄, 上田修一. 『学術用語集 図書館情報学編』改訂の経緯と問題点. 第41回日本図書館学会研究大会発表要綱. 1993-10-17 相模女子大学. p.61-64
- 3) 長澤雅男. 学術用語集 図書館情報学編 暫定版: 平成3年度文部省科学研究費補助金総合研究(A)研究成果報告書. 東京, 東京大学教育学部図書館学研究室, 1993. 181p.

『学術用語集 言語学編』紹介

宮島 達夫* MIYAJIMA Tatsuo

本書ができるまでの経過および問題点は、松本克己「文部省『学術用語集言語学編』について」(『日本語学』1997年2月号)にくわしく述べられているので、それを参照していただきたい。編集経過は、本書巻頭の「刊行にあたって」にも簡潔に記されているが、注意すべきことは、本書が文部省・日本語学会・日本英語学会の共編であって、もともと科研費による英語学会の「新言語学用語標準化の調査研究」が出発点になっていることである。(「新言語学用語」は「新・言語学用語」ではなく「新言語学・用語」である。)

このようないきさつからして、本書は、いちじろしく英語中心・生成文法中心のものとなっている。言語学用語集であるとともに、英語学用語集であり、「新言語学」用語集である。「古期英語」「中期英語」「現代英語」という項目があるのに「古高ドイツ語」「中世日本語」「現代中国語」がないという、だれがみても奇妙な不つりあいは、そのあきらかな証拠である。「ローマ字」はあるが「かな」も「漢字」も「ハングル」もない。日本語固有の現象については、あとでふれるが、ヨーロッパ語でもフランス語の「半過去」「単純過去」やロシア語の「前置格」「長語尾」などの基本的な用語がない。「拡大語彙文法」「拡大標準理論」「改訂拡大標準理論」「Xバー理論」などはあるが、ドイツで発達した「結合価理論」や日本製の「方言周圍論」や「位相論」は、ドイツ語や日本語にかぎらない一般性をもちうるにもかかわらず、無視されている。「術語」も「用語」も「専門語」も「専門用語」もなく、termのところにある訳語は「項」だけであり、以下、terminal (終端)、terminal juncture (末尾連結)、terminal node (終端節点)、terminal string (終端記号列)、ter-

minal symbol (終端記号)、terminal vocabulary (終端記号集合)がつづく、といえ、専門用語研究会員の期待するような言語学用語集とは、かなりちがうことがわかるはずだ。

英語学は日本の言語研究をリードしてきた。たとえば、『英語学辞典』(1940)は、言語学辞典でもあった、しかも当時のものとしては世界に類のすくない水準のものだった、といつてよいだろう。とくに、20世紀後半は、日本にかぎらず、世界的にみてもアメリカの言語学の影響がつよい。本書は、言語研究が英語学(もっと端的にいえばアメリカにおける研究)を中心とするという日本の現状を反映したものである。英語学会がまず用語標準化の必要性をみとめたのも、つぎつぎに生産される術語に統一的な訳語をあたえる必要性をもつともつよく感じたのが英語学の分野だった、という事情があった。本用語集は、アメリカ言語学の論文を日本語に翻訳するときの訳語選定のためのもの、という最初の性格を、つよこのしている。その必要性はみとめても、これが日本における標準的な言語学用語集として世にでることには、すっきりしないものがこのる。やはり本書は『学術用語集』シリーズの1巻としてではなく、英語学会編『新言語学用語集』として出版されるべきではなかったか、とおもう。

訳語の不統一はあたらしい術語にかぎられるわけではない。伝統的な術語であるvoiceやaspect(なぜか、本書にvoiceはない)は、ともに「態」とも「相」とも訳されてきた。概念がまったくちがうから、「受動態~受動相」「進行態~進行相」などと両方の表現があつても、それほどこまらないうが、統一されるにこしたことはない。しかし、ほかの分野と同様に、言語学でも、学術用語集の訳語がうけいれられて一般化するかといつと、やや悲観的になる。自分の分野だけにとじこもつて

*京都橘女子大学教授

いるかぎり、ほかの分野で別の用語がつかわれていても、どうでもよい。その分野が(言語学の)ほかの分野と交渉がすくなく、しかも、その分野における伝統がながければ、用語をかえようという気にはならない。ロシア語学では、「生格」を「属格」に、「完了体」を「完了相」に、あらためるだろうか。

わたしの属する日本語学の世界では、おおくの<国語学者>が、そもそも自分を言語学者だとはおもっていない。言語学者というのは、いくつもの外国語がしゃべれて、めずらしい言語を研究している人のことだから、<国語学>とは別のものである。『学術用語集 言語学編』が出版されたことに関心をしめす<国語学者>は、すくないはずであり、そこからの影響も、さしあたっては、ちいさいものにとどまる。

しかし、当然のことながら、日本語学は言語学の一部であり、日本における言語学の中心的な部分をなすべきものである。たとえば、三省堂の『言語学大辞典』は、日本を中心とするアジアに重点をおく、という方針のもとに編集され、アイヌ語に89ページ、日本語に223ページ、琉球列島の言語に121ページをあて、一方、英語には8ページ、ドイツ語に26ページをさいているにすぎない。これに対しては、また、一方にかたよりすぎている、という批判もあるだろうが、すくなくとも、日本でつくられた学術用語集に「現代英語」があって「現代日本語」がない、という項目選定よりは、健全な態度だろう。

日本語学の分野でも、対訳用語集の必要はふえている。なぜなら、日本語に関するかぎり、日本人による、日本語でかかれた研究文献が最高で、外国の研究は無視してもよい、という幸福な時代は、過去のものになりつつあるからである。そして、上に「かな」がない、ということ指摘したが、もし日本語の表記をまともに外国語で説明しようとするれば、「ひらがな」「かたかな」をはじめ、「変体がな」「万葉がな」「かなづかい」「歴史的か

なづかい」「上代特殊かなづかい」「送りがな」「ふりがな」など、数おおくの用語の訳語が必要になる。すでに英語などで書かれた論文のなかで、これらの概念の表現が不統一なことは、いうまでもない。たとえば、「形容動詞」は「～動詞」という名まえをもちながら、機能的には形容詞、形態的には名詞に近く、そのため、下にあげるような各種の英語訳がつかわれてきた。

adjectival verb
adjective verb
nominal adjective
quasi-adjective
na-type adjective
quality noun
qualitative noun

これは、第一には外国人の問題だが、日本人自身が英語で日本語学の論文をかくことも、めずらしくなくなっている。また、英語ですむ問題ではないが、まずは英語の訳があたえられれば、ほかの外国語に訳すときにも参考になる。これまでの学術用語集は、基本的には、外国の学問をうけいれるために、外国語を日本語になおす必要からつくられたものだった。日本語学の用語をいれるとすれば、それは受信型の用語集から発信型の用語集への変換、というあたらしい経験である。

じつは、本書編集の途中の段階までは、日本語学の用語を積極的にもちこもう、という考えもあり、わたしが西原鈴子・杉戸清樹両氏の協力をえて資料集めをした。しかし、日本語独自の現象を英語になおす<和英>の仕事は、<英和>よりも、はるかに困難である。それで、けっきょく今回の案には日本語学用語をいれないことにしたのである。残念ではあるが、英和の部にくらべて、あきらかに準備不足であり、担当者としても、これは妥当な措置だったとおもう。いずれ、日本語学にかぎらず、日本独自の現象を外国語で表現するための用語集の計画が、じゅうぶんな準備のもとにすすめられることを期待する。

文法用語と語学教育（フランス語を中心に）

Grammatical terms and the teaching of language (based on French as taught in Japan)

青木 三郎* AOKI Saburo

要旨：わが国のフランス語学における文法用語—とりわけ「半過去」という訳語と概念をめぐる、その歴史的経緯を省み、新たな訳語の提案の必要性を主張する。さらに、一般に文法用語がどれほどに専門用語足りうるのかを考察する。

キーワード：文法用語 半過去 専門用語 普通名詞 専門用語の統一規格

1. つまづく文法用語

日本人でフランス語を学ぶ最も頻繁な機会は、大学の第二外国語履修だろう。大学生は英語文法の知識をベースにして、フランス語文法を理解していくわけである。The sky is blueのblueを英文法では動詞補語というが、仏文法では属辞(attribut)といい、動詞beに相当するêtreをコンピュータと説明する。仏文法の説明の仕方は明らかに論理学的な説明の仕方である。仏文法ではclauseのことをproposition（プロポジション）という。つまり論理学概念の命題と文法概念の文節が同じ語で表される。論理学と文法は次元の異なるものだが、西洋の文法概念は論理学が深く浸透している。しかし英語学校文法をベースにして、大学でフランス語を履修する学生にとって、属辞や命題＝文節などのいきなりの出現は混乱のもとと言わざるをえない。

教えるべき文法用語は簡潔にして分かりやすいものがよいはずである。個人的な経験では、英語の「現在完了進行形」を習ったときに大変とまどった記憶がある。「完了」がなぜ「進行」するのか分からなかったのである。（実は今でも分からない…）shouldとwouldを未来形shall/willの過去形だと教わったときも同様に困惑した。未来の過去とは何なのかがイメージできなかったのである。さらに未来の過去shouldが「～すべきだ」という意味になるに至ってはお手上げであった。結局自分なりに得た経験則は、少なくとも英語に関して

は、つべこべ言わず、習うより慣れろ、であった。

2. 涙ぐましい文法用語

しかし、実際に自分が教壇でフランス語を教える立場にたってみると、習うより慣れろとばかりは言われてられない。上述のように英文法の用語が知らぬ間に浸透している学生相手に、可能な範囲で合理的で分かりやすい説明をしたいという職業的意識が働くからである。

仏文法の第一課は名詞の性数である。その説明はおよそ次のようなものである。「フランス語の名詞には男性（例 le soleil＝太陽）と女性（例 la lune＝月）の区別があります。人間や他の動物には生物学的に男（オス）・女（メス）の性的区別＝セックスがありますので、男の子（garçon）は男性形、女の子（fille）とは女性形です。しかし、事物の世界は性別とは関係なく、文法上の区別です。性はセックスではなく、ジャンルの訳です。決して性的イメージとは関係ありません。地球が女性形で、火や空気が男性形であってもセックスのイメージがあるわけではありません」。この説明には二つの問題がある。一つは、男性形・女性形という用語の問題。これは、仏文法のmasculin/fémininの訳語である。つまりフランスの学校文法でそのように教えていることに他ならない。もう一つの問題は、ジャンル（genre）を性と訳すことの妥当性の問題。どうしても性＝セックスという意味の結びつきが強いので、いちいち性はセックスではなく、ジャンルだと断らなければならない。いっそのこと血液型のようにA型とB型

*筑波大学助教授（フランス語学）

のように分けたほうが、よけいな含意がなくてよいのではないか。(個人的には名詞のle(ル)形とla(ラ)形を提唱したい…)

ところで、ここで指摘した二つの問題は、より一般的な問題を含んでいる。一つはフランス語自体の文法研究(理論・記述)における文法概念の妥当性・有効性の問題。もう一つは、文法概念の和訳的的確性の問題。日本語の伝統にない文法概念を理解する努力と、その概念に訳語を創作しなければならぬ宿命という二重のハンディを背負いながら、幕末から現在にいたるまで、私たちは語学と格闘してきたのである。特に文法概念の和訳は、他の諸々の概念と同様に、幕末から明治期にかけて、まさに血のにじむような努力で築き上げてきたものである。しかしお世辞にもよくできたものばかりとはいえない。努力と成果の二つにおいて、文法用語は涙ぐましいのである。

3. 創意工夫の文法用語

半過去という訳語がある。フランス語を習った人ならば誰でも知っている時制である。現在形 nous(私たち)活用の語幹に-aitという変化語尾を結合した形である。原語はimparfait(アンパルフェ)である。この訳語も初めて仏文法で出会ったとき異様な感じがした。「過去における起点と終点の限定のない、継続の動作を表す」という説明が一般的に初学者に行われる。imparfaitはparfait(パーフェクト=動作の完成・完全)に否定接頭辞(im-)がついたものなので、不完全、不完了を表すと理解できる。素直に訳せば「不完全過去」あるいは「未完了過去」とでもなるか。それが「半過去」では一体何のことかすぐに理解できる人はいないだろう。

この訳語に関して歴史的な事情を克明に調査した研究がある。岡田和子(1997)である¹⁾。岡田は蘭・英・独語学におけるperfect/imperfectの訳語とその受容について研究の重点があり、日本の仏語学におけるimparfaitを調査してはいるのではないが、多くの事実を教えてくれる。それによれば、Imperfect(オランダ語のik hadde, 英語のI had)を1777年(安永6年)から1856年(安政3年)までの80年間に、現過、現世の過去、過

現、過去の現世、過去現在、過去ノ不定、過去の現在、未成過去、過去之不定、不定過去、過了現在、未過、不満既往時など様々な訳語が工夫されていることが分かる。試行錯誤の時代とってよいだろう。そこに終止符を打つようにして、1857年『和蘭字典字類(前編)』に「半過去」が現れた。それ以降、仏・英・独語学においてこの語が用いられるようになる。フランス語では、1870年『明要附録』に「半過去」が見られる。それから120年ものあまり仏文法では、この用語が踏襲されているわけである。「半過去」の命名者がそれ以前の訳語に無頓着であったとはとうてい考えられず、先行訳を踏まえた上で「半過去」が考察されたにちがいない。「半過去」は蘭語理解の努力と工夫の上に生まれた用語なのである。先に挙げた「現過、現世の過去、過現、過去の現世、過去現在、過去ノ不定、過去の現在、未成過去、過去之不定、不定過去、過了現在、未過、不満既往時」などの用語から理解できることは、過去(既往時)に行為が完全に終焉していない(不満)ということと、過去に現世(現在)が投影しているという点である。この二つのことは、この時制の異なった二つの側面を表している。「半過去」という用語は、この二つの用法を言い当てているとも理解される。そうだとするならば、訳語としては当時考えられる最良の工夫だったと言えるだろう。

4. 更新する文法用語

英語とオランダ語とドイツ語では「半過去」といっても、その実質は異なっており、明治期になってその訳語を捨ててしまった。フランス語だけは「半過去」が生き延びている。この訳語が歴史的経緯を踏まえて生まれたのに対して、120年もの間、私たち語学の専門家は、同じほどの創意工夫も努力もせず、さらには先人の業績を正当に評価も批判もせず、過ぎてきてしまったことになりはしまいか。半過去という訳語が時代遅れで、理解不可能だ、耐え難いというのが筆者の学生時代の個人的感想なわけだが、専門家になった以上、もう一度、半過去の内実を見直し、その形と意味に最も適切な名前を考案したいと思うわけである。より合理的に説明しやすい用語を考えるべきなの

である。

そのためには、二つの基礎的研究が必要である。一つは、フランス語文法の歴史における imparfait の時制概念の変遷を調査すること。もう一つは、この時制の用法の記述と理論を深め、最も適切な日本語訳を考慮し直すことである。

この時制は、ある過去の場面の回想 (Pierre lisait un livre. ピエールはある本を読んでいた。) および、現実に反した仮定、つまり仮想 (S'il faisait beau もし晴れていたなら) を表す。場面の回想形であり仮想形なのである。これを詰めて、回想・仮想形としておきたいというのが筆者の提言である。あるいは、いっそのこと、意味にこだわらず、形態にだけ忠実になって、-ait 形とした方がよい。(-ait はエと発音するので、動詞 E 形といってもよい。) その方が、上で提起した名詞のル/ラ形との整合性があると言える。

5. 文法用語の統一規格とその限界

本来ならば公式な学術団体である日本フランス語フランス文学会の中に「文法用語検討委員会」のような委員会を設けて、少なくとも日本のフランス語教育における用語の見直しと、合理的かつ現実的な用語を整備することがあって然るべきである。しかし、その一方で用語は慣用が重要であり、今さら、半過去を別の語にしたところで、動詞の -ait 形であることに変わりはないのだから、いたずらに混乱をまねく変更は避け方がよい、という意見もある。しかし文法概念は用語の使用法によって、決定される性質をもつものである。20世紀のフランス言語学でも19世紀に成立を見た学校文法 (伝統文法) に批判を加えて、ブリュノ (Ferdinand Brunot)、さらにそれを批判したダムレット & ピション (Damourette & Pichon)、60年代以降、一般言語学理論の概念をより多く導入した『ラールス現代フランス語文法』など、文法用語の使用法と概念規定は、少しずつずれている部分もあれば、全く異なる場合もある。ギョーム理論のように、学校文法用語を全く使わず、独自の理論的整合性を極限まで追究しようとした事例もある。

このような事情を鑑みると、用語統一が容易に

行われるものではないことは明らかである。

6. 文法用語は専門用語か?

素朴に専門用語とは何かを規定しようとするれば、普通名詞とは異なり、曖昧性、多義性を排除して専門概念を規定する語であり、かつ専門性において等質の分野においてのみ通用する語であると考えられる。つまり一義性、分野性 (あるいは業界性) を特徴とする。統一規格が可能なためには、業界の単一性、等質性が保証されていなければならない。ということは、業界に属していなければ、その語は通用しないか、全く意味をもたないことになる。文法用語は、その意味では、専門用語になりにくいのではないか。なぜならば、文法は、一方では、教育に結びついており、特定の分野・業界に閉じこもることなく、誰にでも理解される用語集でなければならないという使命をもっている。他方では、それに反して、文法は、言語というコミュニケーションシステムの形態と機能であり、それ自体、他のどのシステムにも還元されない、独自の性質をもつ。その性質を規定するような語を発明しようとするれば、おのずと、自己閉鎖的な用語を模索せざるをえなくなり、同一理論によって文法研究に従事している研究者、すなわち、同じラボラトリーの研究者にしか通用しない隠語に墮する危険性がある。

文法用語は、専門用語であると同時に、普通名詞であろうとする。専門用語が普通名詞のように使用されるようになること、これが文法家の願望である。

このように文法用語は、単に技術用語ではない。一般教育という場を通じて、伝達可能 (transmissible) でなければならない。実は、このことは、ともすれば自己閉鎖的、自己目的的な文法研究と文法家に対する批判でもあるのである。

引用文献

- 1) 岡田和子. 蘭・英・独語学における文法用語の成立と変遷Ⅲ - Perfect と Imperfect : 《過去》から《現在》になった Perfect ① (蘭・英の場合) - 外国語教育論集, 第19号, 筑波大学外国語センター, pp.257-294 (1997)

中国全国自然科学名詞審査決定委員会の紹介

李 青 Li Qing
行武かおり* YUKUTAKE Kaori

昨年(1997年)、北京を訪れた際に中国全国自然科学名詞審査決定委員会(略称:全国名詞委)のメンバーと話をする機会を得た。全国名詞委は中国における専門用語の選定を行う国家組織である。漢字を使う国として興味深い点があると思えるので、組織の役割を簡単に紹介する。以下の内容は、主として全国名詞委の案内書を参考にして紹介したものである。

全国名詞委は国務院が認定した国家組織であり、科学技術名詞に対する審査・発表・管理を行う権威的な機関である。1985年に設立している。

国務院は、1987年8月12日に「全国名詞委が審査・発表した名詞は権威性と制約性を持つ。ゆえに全国すべての科学研究機関・教育機関・製造業部門・商業部門および新聞・出版社などは国務院が定める名詞(日本で言う専門用語)を使用しなければならない」と通達している。

全国名詞委の業務は、中国科学技術名詞の運営方針・政策・計画・原則を定め、物理学、工学、農学、医学などの分野および境界分野における名詞の審査・決定・公布・普及・応用などの仕事を系統化し、責任を持って(国家を代表し)管理、運営する。また、台湾や中国語を話す地域における科学技術名詞の交流・調和・統一を展開し、科学技術専門用語に対する研究と国内外の学術交流を行うと記されている。

全国名詞委の第一期主任は、著名な物理学者である銭三強教授が務めた。第二期の主任は著名な化学者である廬嘉錫教授が就任した。

また、国家科学技術委員会(略称:国家科委)、中国科学院(略称:中科院)、国家教育委員会(略称:国家教委)、中国科学技術協会、国家自然

科学基金委員会、新聞出版署、国家技術監督局、国家語言文字委員会(略称:国家語委)などの関係者が副主任を務めた。第三期の主任は廬嘉錫教授が引き続き務めている。主任と副主任によって、常務委員会を構成している。実務的には、国家科委と中科院が共同で中国の各分野の著名人、専門家、教授90名余りを招聘し、全国名詞委員会を発足させている。

全国名詞委の事務局は、全国自然科学名詞審査決定委員会事務センターである。その主な職責は全国名詞委員会が定めた各決議文を執行し、名詞委の任務を実行に移し、各分野の委員会の仕事を調整する。また、全国名詞委員会が公布した科学技術名詞を編集、出版し、国内外の学術交流を行い、全国名詞委員会の日常業務を運営する。

全国名詞委員会の業務は設立以来、国家および政府各機関に重視されている。国務院の科学技術統一制限に関する指示や理念を執行するために、国家科学委員会、中国科学院、国家教育委員会、新聞出版署が1990年6月23日に共同声明を発表し、三つの要望を提示した。

(1)すべてのマスコミ機関はマスメディアを通じて名詞統一の重要な意義を宣伝するだけでなく、率先して使用すべきである。

(2)すべての出版機関は今後、雑誌、文献、資料などを編集する際に、発表された名詞を使用すべきである。特に辞書、字典、文献は発表した名詞を使ったかどうかを書籍の質をはかる基準とする。

(3)今後すべての教科書を作成・出版する時は、発表された各学科の名詞を使用しなければならない。

*麗澤大学

この通達の趣旨は、統一された名詞の普及と使

用を促進することにある。

全国名詞委員会は、理学、工学、農業、医学と境界分野からなる49の分野の委員会で構成されており、1700人余りの科学者が名詞審査決定の仕事に参加している。現在、天文学・物理学・生物化学・電子学・農学・医学等の30分野の名詞を公布し、そして8分野の海外版（繁体字で書いたもの）を出版した。これらの分野の名詞が次々と出版されることにより、科学研究・教育と学术交流に重要な役割を果たし、中国の科学技術名詞統一事業の基盤が固められた。

全国名詞委は、国内・海外の学术交流を重視するばかりでなく、自らの名詞審査レベルを高める

ために、国内、海外の専門用語機関および専門家と密接に交流し、専門用語研究に関する活動に積極的に参加し、他国の経験を手本にし、国際レベルに達するように努めている。

中国科学技術名詞は、中国における漢字文化の基礎の上に作られたものである。漢語（中国語）は、世界の四分一の人口が使用、あるいは理解し得る言葉である。したがって漢語科学技術名詞を統一する役目は必要不可欠である。名詞委は積極的に国内海外の専門用語に関する理論を研究し、漢語の特徴と結合し、先人が研究した成果を統括した上で、中国科学技術専門用語理論を打ち立て、中国の科学技術専門用語学派を興すように努めている。

名詞委が公布したインターネットに関する名詞を幾つか選んで紹介する。

英 語	中国語	日本語
Internet	因特网	インターネット
WWW	万维网	WWW
homepage	主页	ホームページ
E-mail	电子函件	E-メール
hypermedia	超文体	ハイパーメディア
hypertext	超媒体	ハイパーテキスト
fire wall	防火墙	ファイヤーウォール
directory service	名录服务	ディレクトリ・サービス

国内刊行用語辞典リスト(1998 前半)

凡 例

1. 収録範囲

前号(第15号)収録以降(1998年1月から1998年7月)に国内で発行された専門用語辞典(集)を収録した。新語辞典、国語辞典、古語辞典、方言辞典などは収録対象としていない。

2. 情報源

Kinokuniya和書データベースBook Webほか

3. 書誌記述

記述項目は、書名、著者(編者)名、出版社名、出版年月、ページ数、価格、国際標準図書番号(ISBN)とした。

4. 配列

日本十進分類法(NDC)にしたがって、分類順に配列した。

5. 例示

分類見出し	件名		書名						
↑	↑		↓						
007	情報処理		コンピュータ技術基礎用語事典						
			新電気編集部、オーム社、	97-12、	248p、	2,800円、	ISBN:4274945952		
			↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
			著者(編者)名	出版社名	出版年月	頁数	価格	ISBN	

6. その他

このリストについてのご意見やお問い合わせは、編集委員会までお寄せください。

007 情報処理

デジタル商品用語辞典

タイム編集部、小学館、98-01、310p、552円、ISBN:4094160310

パソコン用語集・CD-ROMの使い方 ウィンドウズ活用アイデア101 第8巻

学習研究社、98-02、48p、3,500円、ISBN:4055003471

最新パソコン用語事典〈'98-'99年版〉

岡本茂監修、技術評論社、98-03、741p、1,580円、ISBN:4774105554

Macintosh なんでも用語事典

インターアクティブ、技術評論社、98-03、555p、1,980円、ISBN:4774105546

最新マッキントッシュ用語事典

平山文昭他. 池田書店. 98-05. 367p. 1,600円. ISBN:4262140563

Macintosh 用語事典'98-'99 年版

山本英司. アスキー. 98-06. 565p. 2,300円. ISBN:475611802X

シスアド合格用語事典

木村宏一. オーム社. 98-07. 266p. 1,800円. ISBN:427416473X

188.7 宗教

真宗用語辞典 蓮如篇

稲城選恵. 法蔵館. 98-03. 270,55p. 7,500円. ISBN:483187017X

319 国際

国際情勢ニュースワード—最新情報&用語事典(1998-1999)

時事総合研究所. 時事通信社. 98-05. 324p. 1,600円. ISBN:4788798174

320 法律

PL用語事典

大屋賞. 日本住宅設備システム協会. 98-03. 214p. 3,000円.

和英英訳・法律基本用語辞典

菊地義明. 洋販出版. 98-04. 267p. 2,200円. ISBN:4896846540

図解による法律用語辞典—辞書+体系書の立体的編集

自由国民社. 98-06. 1,196p. 2,300円. ISBN:4426401119

法律基本用語集—民事訴訟法

早稲田司法試験ゼミナ. 早稲田経営出版. 98-06. 179p. 1,600円. ISBN:4847100565

法律基本用語集—刑法

早稲田司法試験ゼミナ. 早稲田経営出版. 98-07. 163p. 1,500円. ISBN:4847100573

335/336 経営

地方公営企業用語辞典

地方公営企業制度研究会. ぎょうせい. 98-02. 268p. 2,800円. ISBN:4324051151

338 金融

金融証券用語辞典 第6版

銀行研修社. 98-01. 744p. 3,524円. ISBN:476573854X

貸付用語辞典 第7版

銀行研修社. 98-03. 646p. 3,524円. ISBN:4765738566

国際金融用語辞典

銀行研修社. 98-03. 650p. 3,524円. ISBN:4765738574

360 社会学

社労士合格ポイント用語集('98年版)

東京法経学院出版制作部. 東京法経学院出版. 98-02. 365p. 2,600円.

ISBN:4808962403

イラストでみる 介護福祉用語事典

豊沢隆弘他. 福祉教育カレッジ. 医学評論社 (発売). 98-04. 190p. 2,000円.

ISBN:4872113500

ケアマネジメント用語集

遠藤英俊監修. 日総研出版. 98-05. 295p. 2,700円. ISBN:4890142932

390 軍事

最新英和軍事用語辞典

木村謙二. グリーンアロー出版社. 98-03. 286p. 3,600円. ISBN:4766332377

430 化学

岩波理化学辞典 第5版

長倉三郎. 岩波書店. 98-02. 1,854p. 11,000円. ISBN:4000800906

化学・和英用語集

橋爪 斌・原 正. 化学同人. 98-04. 408,2p. 2,000円. ISBN:4759807934

学生 化学用語辞典

大学教育化学研究会. 共立出版. 98-05. 361p. 2,200円. ISBN:4320043472

448 地図

地図学用語辞典

日本国際地図学会地図用語専門部会. 技報堂出版. 98-02. 515p. 6,600円

ISBN:4765540022

地理情報システム用語辞典

星仰他. ウラップユニ; 朝日出版社 (発売). 98-07. 230p. 2,700円

ISBN:4255980241

490 医学

放射線医療用語辞典

放射線医療用語辞典編集委員会. コロナ社. 98-04. 638p. 6,300円.

ISBN:433907070X

放射線医学博識用語辞典—放射線診断こぼれ話

多田信平. 日本医事新報社 (発売). 98-04. 141p. 1,900円. ISBN:4784941568

老年医学用語集

老年医学用語研究委員会. ワールドプランニング. 98-04. 664p. 14,000円.

ISBN:4948742295

内科学用語集 改訂5版

日本内科学会. 医学書院. 98-05. 3,200円. ISBN:4260136410

食道疾患用語集

金原出版. 98-06. 4,500円. ISBN:4307201337

500 工学・技術

英和・和英 科学技術と産業用語辞典

佐藤佳弘他. 富士書房. 98-05. 911p. 4,300円. ISBN:4938298074

実用 CAD/CAM用語辞典

武藤一夫. 日刊工業新聞社. 98-06. 314p. 3,000円. ISBN:4526041777

519 衛生工学・環境

新・下水道技術用語辞典

下水道技術研究会. 山海堂. 98-04. 294p. 3,500円. ISBN:4381011341

環境計画・デザイン用語集 和英・英和

高山啓子他. 公害対策技術同友会. 98-05. 563p. 2,857円. ISBN:4874891268

520 建築

図解 建築施工用語集 全訂版

安達嘉一他. 東洋書店. 98-02. 419p. 2,800円. ISBN:4885952174

イラストでわかる管工事用語集

中井多喜雄他. 学芸出版社. 98-03. 318p. 3,000円. ISBN:4761530669

建築用語事典

建築用語研究会. 学隆社. 98-04. 375, 4p. 1,460円. ISBN:4762100315

住宅・不動産用語辞典

住宅・不動産用語辞典編集委員会. 井上書院. 98-04. 342p. 3,200円.

ISBN:4753000850

建築設備用語辞典

石副昭監修. 中井多喜雄. 技報堂出版. 98-05. 896p. 13,000円.

ISBN:4765520080

インターplus 版 学術用語・JIS用語に基づく英和・和英建築・土木5万語中辞典

インターplus 対訳センター. アルファベータ. 98-06. 2,591p. 12,000円.

ISBN:4871984885

図解建築用語辞典

理工学社. 98-07. 427p. 3,200円. ISBN:4844530232

530 機械工学

英日中機械用語辞典

工業調査会. 98-05. 1,570p. 18,000円. ISBN:4769370644

547/549 情報通信

光通信・光メモリ用語辞典

光産業技術振興協会. コロナ社. 98-03. 190p. 2,300円. ISBN:4339006866

550 海事工学

英和 海洋航海用語辞典

四之宮博. 成山堂書店. 98-03. 368, 2p. 3,400円. ISBN:442511034X

英和・和英 機関用語辞典

升田政和. 成山堂書店. 98-03. 318p. 3,000円. ISBN:4425110439

570 化学工業

化学物質 環境・安全管理用語事典

化学工業日報社. 98-07. 462p. 5,000円. ISBN:4873262798

610 農学

土壌肥料用語事典

藤原俊六郎他. 農山漁村文化協会. 98-04. 338p. 2,667円. ISBN:4540971603

673 商業経営

販促用語事典

マーケティング・コミュニケーション研究会. 日刊工業新聞社. 98-03. 325p. 3,200円.
ISBN:4526041599

690 通信

今さら聞けないケーブルテレビ&衛星用語集 ビジネスの現場で役立つ

サテライトガッツ社. 98-01. 221p. 2,500円.

702 美術

フランス美術基本用語

山梨俊夫他. 大修館書店. 98-07. 160p. 1,700円. ISBN:4469250600

760 音楽

最新音楽用語事典

リット-ミュージック. 98-03. 429p. 2,800円. ISBN:4845603004

770 演劇

ステージ用語事典

シミズ舞台工芸. リット-ミュージック. 98-06. 207p. 2,000円. ISBN:484560311X

778 映画

エヴァンゲリオン用語事典

エヴァ用語事典編集局. 八幡書店. 98-05. 232p. 1,300円. ISBN:4893503278

900 文学

最新文学批評用語辞典

川口喬一他. 研究社出版. 98-07. 344p. 2,800円. ISBN:4327461342

「専門用語研究」投稿規定

1. 「専門用語研究」(以下会誌という)には、下記の内容に関する論文・記事を掲載する。
 - ・ターミノロジーの理論と応用
 - ・専門用語集の作成技術
 - ・その他、専門用語に関するもの
2. 会員は、会誌に自由に投稿することができる。編集委員会からの依頼により執筆することもできる。

3. 原稿の書き方

3.1 原稿用紙

原稿は、通常のA4サイズ横書き原稿用紙(20字×20字)か、ワードプロセッサを使用する。ワードプロセッサを使用する場合は、A4用紙に1行20字、20行で作成し、印刷する。また、可能であれば、MS-DOSテキスト形式でフロッピーに保存し、印刷物と一緒に送付する。

3.2 原稿の長さ

全体で図表ほかを含めて、原稿用紙16枚から32枚とする。原稿用紙4枚で刷り上がり1ページとなる。執筆依頼時に別途指定ある場合はそれに従う。

3.3 原稿の仕様

原稿には、以下の内容を記入する。

- ・和文と英文の、表題、著者名、所属
- ・和文の、抄録(250字前後)とキーワード(5から10語)
(可能ならば、英文の抄録(150語前後)とキーワード(5から10語)も)
- ・本文(ページをつける)
- ・図表など(番号と表題をつけ、朱筆で文中に挿入位置を指定する)
- ・引用文献(本文中に肩付き数字¹⁾²⁾・・・を記入する)
- ・参考文献、参考図書(本文を読む上で参考になるものがあれば)

4. 原稿の受理、査読

投稿原稿は、当研究会事務局が受け付けた日を受付日とし、会誌編集委員会で査読を行なう。査読結果をもとに、会誌編集委員会で掲載の可否を決定する。委員会で内容・表現などについて修正が必要と認めた場合、執筆者に修正依頼する。

5. 校正依頼

執筆者に初校を依頼する。この際、大幅な修正・加筆は行なわないこと。なお、論旨に差し支えない範囲で、編集委員会が内容の変更を求めることがある。

6. 掲載原稿の扱い

会誌に掲載された原稿、フロッピーは返却しない。

7. 謝礼

執筆者には、掲載された会誌10冊を無料贈呈する。これ以上および抜刷を希望する場合は、有料となる。校正時に申し込むこと。

8. 著作権

本誌に掲載された論文、記事の著作権は、当研究会に帰属する。

9. 原稿提出先

専門用語研究会会誌編集委員会

編集後記

◆今回は、1997年に刊行された用語集5件について、刊行の経緯を編集者にお願したところ、「言語学編」が、すでに、「日本語学」に掲載されたため、宮島先生に別な観点から紹介をしていただきました。当初、上記用語集のほか、「岩波理化学辞典」「分析化学用語集」についても原稿依頼の上、「特集：専門用語集の発刊を語る」を予定していたのですが、残念ながら特集には至りませんでした。

◆毎年1回紹介しておりました「用語辞典リスト」は今回、98年前半半年分を収録しました。半年でもかなりの数となりました。採録には、インターネット経由で紀伊國屋書店のBOOK/WEBを使用し、「用語集」「用語辞典」をキーワードに検索しています。しかし、タイトル中に「用語」がないと検索できないため、「岩波理化学辞典」などは別な媒体で探さなければなりません。

◆「用語集」の検索の最中、弘前大学国語教育講座・小倉肇教授のホームページにぶつかり、語学・国語科教育関連リンク集の日本語関連リスト第6部 用語辞典を見つけました。言辞門、方言門、悪魔門、財宝門、人倫門、軟軒門、電腦門など32部門にわたって、「コギャル用語辞典」「阿波踊り辞典」「長島茂雄普及協会用語解説」などから「日英仏技術用語集」などにいたる600余りの用語辞典がリストされています(<http://www.fed.hirosaki-u.ac.jp>)。その中の一つ、「言辞門」分野に、「新明解図書館情報学用語辞典」がありました。これは、本号の著者のお一人、上田修一先生らがホームページの中で編集するパロディ的用语辞典で思わずニタッとする解釈がつけられています。たとえば、

- ・活字離れ (読み仮名をいれるために行間を大きく空ける印刷技法。大学生向けの本に多く採用される)
- ・紀要 (日本の製糸業、印刷業、製本業を支える一方、地球温暖化の原因とみられているが、内部を見たものがないので真偽は不明)
- ・再現率 (図書館に現れる頻度)
- ・ジャパン・マーク (「日の丸」の英訳)
- ・レビュージャーナル review journal (宝塚雑誌)

きりがありませんが、こんな具合。あなたも傑作を創作してみませんか。(戸塚)

◆「文法用語と語学教育(フランス語を中心に)」の執筆者 青木三郎氏のご紹介。当研究会の会員に、バルヴァド・ソフィー(Palvad Sophie)さんというフランス女性がおられます。彼女は、沖縄の琉球大学で教鞭をとっており、シンポジウムの時には良く出席されるので、ご存知の方も多いでしょう。先に、沖縄で開かれたシンポジウムには、筑波大学の青木三郎先生が参加し、ソフィーさんといろいろご一緒に仕事をされたとのことです。本年5月16日には、青山学院で、フランス語学会例会があり、私も同席。ソフィーさんから青木先生を紹介され、私も研究会のPRをしたのでした。11月に予定されている「文字シンポジウム」には参加下さるとのことでしたので、何か会報にも原稿をお願し、快諾をいただき、ご寄稿いただいた次第です。

◆話は飛んで、絵の情報量は、文字の何倍にもなる例として、引き合いに出されるのがこのような図です。



見ればすぐわかるが、これを文字で説明するには大変だという。しかし、逆の場合があることはあまり強調されていません。すなわち、「海で永遠を感じた」という文があったとします。これに海の写真を1枚出せば、それはもう、湘南か九十九里と現実味を帯びてしまう。それならば、手描きの絵を使えばと考えても、絵の表現力は、見る人総てに、永遠を感じさせ得るかはなほ疑問ですし、さらに音の威力も絵以上である例では、テレビジョンや映画で、真っ黒な画面に銃声一発、殺人か自殺か、絵を使うよりもっと迫力ある訴える力を持っている作品になっている時が真実としてあります。若者の文字離れと良く言われますが、人間としての偉大な発明である文字の持つ重要性を強調して、し過ぎることはないと思うわけです。ただし、そこには、ローマ字、略字などの良く知られた問題が常に存在するのですけれど。

(中山)

「文字シンポジウム」のお知らせ

このたび専門用語研究会では情報知識学会との共催で「文字シンポジウム」を下記の通り開催いたします。

今回は、文字の機能を視点として、漢字に配慮し、各方面の研究の概要と動向を、客観的に捉えようとするものです。文字については様々な意見が様々な場面で討議されている現状を鑑み、序論的な講演を行おうとするものです。ふるって、ご参加下さい。

- 日時： 1998年11月6日(金) 午後1時30分～5時
 場所： 日本学術会議 講堂(地下鉄千代田線乃木坂駅下車すぐ)
 主催： 専門用語研究会・情報知識学会
 後援： 情報科学技術協会・情報処理学会(交渉中)
 申込方法： 下記申込書(コピー可)で専門用語研究会まで郵送またはFAXでお申し込み下さい。(会場が満員になりしだい受付を中止させていただきます)

～プログラムおよび講師(予定)～

挨拶	柴田 武	(専門用語研究会会長)	1:30-1:35
趣旨説明	仲本 秀四郎	(IRIS)	1:35-1:40
1. 文字概説	矢島 文夫	(アジア・アフリカ図書館長)	1:40-2:15
2. 日本語表記	石井 久雄	(武蔵大学教授)	2:15-2:50
3. 漢字構成	松岡 栄志	(東京学芸大学教授)	2:50-3:25
(休憩)			3:25-3:40
4. 脳と文字	杉下 守弘	(東京大学医学部教授)	3:40-4:15
5. 漢字コード	宮沢 彰	(学術情報センター教授)	4:15-4:50
専門用語研究会総会			5:00-5:20
懇談会(はあといん乃木坂)			5:45-7:30

資料代 会員 2,000円 一般 3,000円 学生 1,000円 (懇談会参加者は別途 6,000円)
 (資料代等は当日受付で申し受けます)

申込先 〒102-0082東京都千代田区一番町4-6 一番町中央ビル2F (JIST内)
 専門用語研究会 (Fax. 03-3262-8960)

専門用語研究会 行

「文字シンポジウム」参加申込書

氏名			
機関名			
連絡先住所	〒		
	Tel.	- -	Fax. - -
懇談会出欠	<input type="checkbox"/> 出席	<input type="checkbox"/> 欠席	領収書有無 <input type="checkbox"/> 有 (<input type="checkbox"/> 機関名 <input type="checkbox"/> 個人名) <input type="checkbox"/> 無

編集委員会委員

太田 泰弘 文教大学
四ノ宮明夫 大正製薬
戸塚 隆哉 KMKデジテックス (委員長)
中山 亮一 リョウ・プロダクション
牧野 正久 東京理科大学
山下 泰弘 学術情報センター
山本 昭 国学院大学

専門用語研究 第16号

(1998年8月31日発行)

発行所 専門用語研究会

〒102-0082東京都千代田区一番町4-6

一番町中央ビル2F

日本総合技術研究所(JIST)内

Tel. 03-3262-8956

Fax. 03-3262-8960